

渥美、知多兩半島と其海岸

石 川 成 章

本州の中央部、東京大阪間の太平洋沿岸に於て國防、交通、貿易等あらゆる方面より、最も重要な海岸線の灣入は三河灣と伊勢灣とであることは地圖を一瞥して明瞭なる所であつて、其灣口を扼せるは、伊良湖、知多、志摩の三半島と、其間に羅列せる答志列島とである。

渥美半島は遠參の地を東北より西南に斜走し來れる、赤石山系の連續で、其骨髓は古生層の珪岩、輝綠凝灰岩、石灰岩、砂岩、粘板岩の堅岩より成り、岩層の走向と畧々平行に東々北より西々南に走り、其餘勢は答志列島を経て志摩半島に及んで居る、この古生層の骨の點を點綴し皮肉を爲して居るのは、第四紀古層である、半島の斗出せる方向が古生層の走向と大體一致して居るから、海岸線の屈曲少なく、殊に太平

洋に面する南側は斷崖を以て海に臨み奇麗に殆んど一直線を畫いて居る、其北岸即ち三河灣に面せる側には、福江灣と田原灣との二個の小灣入のある以外は、矢張屈曲に乏しい、この二小灣も其口に潮流に因れる砂洲があるのみで堅岩の突出部は著しいものが無い。

知多半島は主として第三紀層の丘陵より成り南方に斗出して、渥美半島と共に三河灣を擁し東側は一葦帶水の衣ケ浦を距て、三河西南部の平原に對し、西側は丘陵の急斜面を以て伊勢海に臨んで居る、丘陵地を構成せる第三紀層は概して西北東南に走り、東北又は西南に緩斜して居る、半島の北部の第三紀新層は、凝灰岩、砂岩、頁岩、圓礫岩等何れも軟弱であるが南部に至るに従て第三紀古層が現はれ岩質割合に堅く

傾斜も亦稍急と爲る。斯く半島斗出の方向と岩層の走向とが平行で無いから、海波の浸蝕を受け、海岸線の屈曲も出来る譯であるが、中部以北は、第三紀岩石が軟弱で海岸には低平なる砂濱を形成し海は遠淺であるから、灣入は少なく、巨舶の碇泊に適する處が無いが、南方に至るに従て岩石は割合に硬く、海岸に低平の地が少なく、就中西南海岸は丘陵の壁峭を以て海に臨み處々に狭小なる砂濱が介在するだけで、東岸とは餘程風趣を異にして居る、半島の南端は東側も南側も共に灣入に富み、船舶の碇泊に最も便である。

知多半島の東側には半田港、武豊港、大井港、師崎港があり西及び西南海岸には横須賀港、大野港、常滑港、野間港、内海港、豊濱港があつて、東は三河灣内に宮崎、蒲郡、豊橋、田原、福江の諸港、西に熱田、桑名、四日市、神津、二見、鳥羽等の諸港との間に毎日汽船の往復があり、陸上には、東海道鐵道線大府驛より分岐せる武豊線は半田、龜崎、成岩の諸町を經、東海

岸を走りて武豊に至り、愛知電車は熱田より半島の西海岸を縫ふて常滑町まで通じて居る、斯く水陸共に交通至便で、物資の需給も亦自由であるが、渥美半島は田原港、福江港に小汽船の交通があるのみで、遠淺であつて大船の碇泊に適し無い、陸上には、豊橋市師團前より田原町まで、本年一月電車が開通し、豊橋停車場との間も近々連絡せらるゝ筈である、先年豊橋より伊良湖試砲所まで軍用鐵道を布設せらるゝとの噂があつたが、一向實現せられない、要するに渥美半島の交通は、田原町まで以外は尙頗る不便で、知多半島とは比較にならない。

知多半島は元來人口稠密（南部丘陵地は然らず）で且つ富力の程度の高い地方であつて、半島内に横須賀、半田、成岩、武豊、大野、常滑、西濱、野間、内海、豊濱、師崎、大井の諸名邑がありて既に町制を布き、就中半田町は古來酒、醬油、酢の產出を以て遠近に知られ、今は九三麥酒株式會社があつて麥酒の醸造も亦盛んである、又常滑町は常滑燒の窯業が年を追て急速の



尾張新舞子風景 夕陽

發達を遂げ、町内に陶器學校の設備あり銳意改良進歩を謀り、明治卅三年頃年産額約五六拾萬圓であつたものが、今は約四百萬圓に達せんとする盛況である。

其他夏期海水浴場として繁盛なるは、

大野、^{ウツミ}内海、野間、^{モロサキ}師崎の諸町で、就中大野の海水浴は維新前から附近に名高く、今は前記の諸港に、毎日二回熱田港より汽船の往復があり愛知電軌會社は、大野町の北、松青松白の海岸に新舞子遊園地を建設し、大野町の海水浴場に

渥美、知多半島と其海岸

は新式の浴場を設け、海陸共に競ふて浴客の誘引に努力して居る結果、知多半島の海水浴は近年非常の發展を遂げた、

斯く産業交通の上に知多半島沿岸は優勢であるのに對し、渥美半島の沿岸は一向振はない、



尾張大野風景 海岸

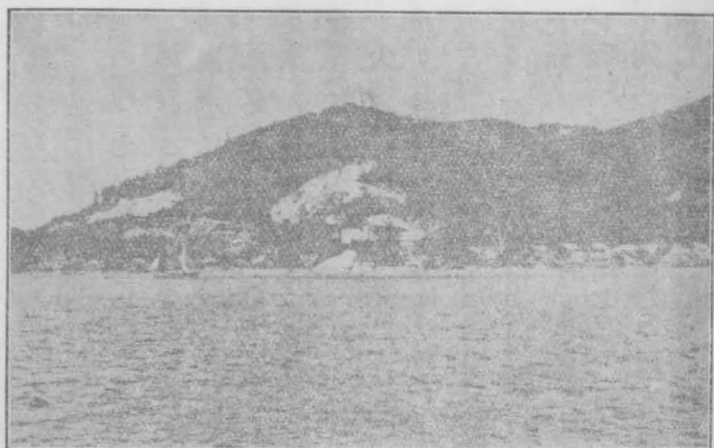
産業としては漁業のみであるが、近年田原灣内から沿岸一帯海藻の採取と、鰻の養殖とが漸く盛に爲りつゝあるのは注意に値する、この二産業は今より百餘年前、田原

の老職であつた渡邊華山氏が夙に著目した所であつて、氏は藹書に就て其養殖の方法を研究し、其結果を詳細に記述して、田原地方の産業として是非奨励せねばならぬものだと切言して居るのには其先見の明に驚くが、遅まきながら百年後の今日、其所見が著々實現されて行くので、英魂も定めて地下に微笑を禁じ得まい。

渥美半島の基點田原町は幕末に於ける非凡の畫伯とし、憂國卓見の偉人として、將た忠孝節義の士として前記の渡邊華山先生を出したが、伊良湖岬の附近伊良湖村から文化文政の頃、天稟の歌人糟谷磯丸氏を出した、氏は通稱を半之亟といひ、元來一漁夫で、眼に一丁字も無かつたが母に至孝で、其病を伊良湖明神に祈る事二十年、其間一日旅人が社頭の扁額を讀むを聴き、其何なるかを問ふて初めて和歌なる事を知り、爾來假名より習ひ初めて、専心一意和歌を習學し、漸く大成した其詠歌は、天眞の至情に出るものが多いので、人を感動せしむること深く、遂に京都の繡紳に多くの知己を得て、中には其

草蘆を訪問する人もあり、其名遠近に聞えた。

俳聖芭蕉も伊良湖崎に遊んで其風光に憧憬し幾多の佳什を出した、斯く渥美半島は産業や交通の上では一向振はないが、其代りに優秀なる美術家や文學者を出した、是恐くは其優美秀麗なる自然の風光が大に興りて力あるものと考へてよからう、是に反し知多半島は産業は殷盛で交通は至便であるが、前記の如き人物は一向輩出し無い様である、天然の名勝として渥美半島には田原町の北一里餘白谷シロヤの海岸に白雲洞があり、西方江比間村の南方約一里の處に鸚鵡石があり、其西南の海角には石門がある、白雲洞は古生層石灰岩中の洞窟で、此地方は昔から石灰原料、又は近年セメント用として盛に石灰岩を掘採せるが、數年前偶然一大洞窟を發見し、其後故神保博士其他數多の文人、學者之を探檢せられ洞名は神保博士の命名に係り、其後天然記念物として永く保存せらるゝ事と爲つた、洞は白谷の海岸にありて海面より高き事約二十五米、入口は二三尺で、僅に人のクマリて入り得る位に



愛知縣田原町白谷 上海ヨリ見た白谷全景

小の鐘乳石が數多美事に垂下し、床には石筍が簇生し、中には鐘乳石と合して壯麗なる石柱を

温美、知多半島と其海岸

過ぎな
いが、
内に入
れば廣
くして
四室に
分たれ
何れも
狭き通
路を以
て連絡
し、高
さは約
三十五
米、幅
三十米
天井よ
りは大



愛知縣田原町白谷 白雲洞

爲すものもあり、頗る氣拔雄偉である、又洞内に水流があり、是が海岸に開口して居つて、折々鰻が

流れ出
る事が
あるが
皆盲目
である
といふ
のは面
白い。
鵜鵝
石は、
半島の
西端に
近き、
江比間
村より
南方に
進む事

約一里 古生層の狭き溪谷を溯つた處に在る、峽谷の兩側は硅岩の削壁で、谷側に立て言語を發すれば是が谿の向側の削壁に反響して、恰かも鸚鵡が人語を繰返すが如く聞ゆるのであつて、附近は幽邃で其距離が適當であるから、反響の聞こえ方が恰好に出来るのであつて、古來一の名勝と爲つて居る。

渥美半島は歴史的の名勝には甚だ乏しい。

知多半島は天然の名勝には乏しいが、歴史的な名勝としては、野間の大御堂寺、源義朝、平康頼等の墳墓がある。

大御堂寺は野間の海岸から僅かに數町の處に在り、白鳳年間役の小角の創建に係り、半島第一の古刹で、義朝の遺物等寶物が尙保存せられて居る、義朝は知己長田莊司忠致の家に於て詐謀に係り、一朝の英豪も怨を吞て空しく孺子の手に斃れ、爾來凄風冷雨七百年、田圃の間に石壘にて圍まれたる數頃の地が、樹木鬱蒼として居る中に、叢爾たる墓石が青苔に埋れて淋敷立て居る、其傍に首洗の小池がある、義朝と共に難に殉

した鎌田政家の墓、及び池禪尼の墓、平康頼の墓が其側に在り、織田信孝の墓も亦其附近に在る。天産物は知多半島に陶土と磨砂と褐炭とがあり、渥美半島には白谷の石灰岩がある。

知多半島の陶土は常滑焼の原料であつて、第三紀層中の粘土である、産地は常滑町字東平井字郷枝、字千代、奥田村字奥田前、字鎌山、上野間村字矢口、字松代、字西ノ脇、字小手廻間、字里屋敷、字長箴、字大海道、字羽根前、字平井、字藪下、成岩町字天神下、内海村字龜ノ口等である、常滑焼の内紫褐色の陶器は成岩町産の黄赤色緻密質粘土を、一般に用ふる陶土に少しく混和して焼くのである、農商務省分析課に於て陶器の原料を分析した結果は次の通りである。(百分比)

産地	原料	第二		石灰	苦土	加里	曹達	熱灼減量
		酸化	鐵					
成岩	赤色	三・三	一・六	三・六	〇・八	〇・六	〇・六	〇・五
町	緻密	三・三	一・六	三・六	〇・八	〇・六	〇・六	〇・五
常滑	粘土	三・三	一・六	三・六	〇・八	〇・六	〇・六	〇・五
町	赤色	三・三	一・六	三・六	〇・八	〇・六	〇・六	〇・五
東平	粘土	三・三	一・六	三・六	〇・八	〇・六	〇・六	〇・五
井	粘土	三・三	一・六	三・六	〇・八	〇・六	〇・六	〇・五

此粘土は主として花崗岩又は片麻岩の分解によりて生成したもので、第三紀層の上部圓礫岩の下に成層して居る。

常滑焼は水道管、瓶、壺、米搗臼の様な粗大なるものが主で、近年耐酸の工夫を凝らして居る、需要は鐵管代用の爲め近年著しく増加した、常滑焼には花瓶、茶器等、風雅なものもあるが、是は其量が少ない、常滑の他、成岩町、内海町からも少しく陶器を製出するが頗る少量で常滑とは比較に爲らぬ、磨砂は第三紀上部層中の細微なる浮石砂を採取するので、産地は板山村字廣脇、布土村字西向、字豆池、字志洞、緒川村砂彌田、生濱村字三本松、字坪釜、荒尾村字見晴、字下畑、大田村字天神下の上、上野間村字奥熊高等で、分布は甚だ廣く、厚さは一米から最大三米に達する處もある、琢磨用、製紙用又は米搗用に供する、農商務省分析課で分析した結果は左の通りである。(百分比)

硅酸	礬土	第二酸	石灰	苦土	加里	曹達	熱灼減量
七・六	三・六	〇・六	一・四	〇・五	四・四	二・七	四・六

溫美、知多半島と其海岸

褐炭は矢張第三紀層の間に介在するもので、處々に其露頭が觀らるゝ、先づ知多半島の西南海岸で、上野間村字泉の傍に露出せるものは黝色凝灰質の頁岩間に在つて、北六十二度西に走り東北に緩斜し、厚さ一尺乃至一尺八寸ある、この炭層は一溪流を距て其西北岸にも露出して居る、農商務省分析課に於る分析の結果は次の如くである。(百分比)

水	〇・九	揮發物	五・六	骸炭	三・七	(粘結セズ)
灰	三・〇	硫黄	〇・七			

明治廿一年頃初て之を試掘し、其後度々試掘を爲した様子であるが、所在が海岸に近く海水侵入し易く、排水に多大の費用と勢力とを要するに係らず、分析表の示する如く、灰分多くして骸分少なく、炭質が劣等であるから、事業は幾何もなく休止と爲つた模様である。

東海岸なる布土村にも軟質砂岩の間に褐炭の厚さ一尺内外のものがあるが、多量の粘土を雜へ、性質極めて粗惡であるから、實用に適しない。右の外廣目村字竹の岡にも細粒粘土質砂岩と、

黝色粘土層との間に褐炭の一薄層が在るが是亦粗質で稼行に堪へない。

石灰岩 渥美半島の東部田原町の西北には、古生層中に二條の石灰岩が向斜層を爲し海岸に平行に走つて居る、明治の初年頃より之を石灰焼の原料として掘採し、近年は「セメント」の原料として、一層盛に之を掘採して、水運を利用し、名古屋、大阪等各需要地に輸送して居る、灰白色で不純物少なく性質優良である、農商務省に於ける分析の結果は次の如し、

産 地	炭酸石灰	炭酸苦土	礬土及 酸化鐵	不溶殘滓
田原町 シロヤ	六・五	〇・五	痕跡	〇・五
白谷村	六・七	一・五	〇・三	一・〇〇
山神村	六・三	一・二	〇・三	〇・三〇

沿岸の海深と砂洲、知多半島の沿岸は、東南の方は何れも遠淺であつて、砂洲が廣く發達し五尋の等深線は海岸から餘程離れて居る、東岸の北部衣ヶ浦の如きは、土砂の爲に年々海の埋めらるゝ所で、若し今後高さ約十五尺土砂で埋めらるゝか、又は海底が隆起したならば大部分

陸と爲り了るであらう、渥美半島の太平洋岸は一帶の懸崖であるが、併し懸崖の下に少許の砂洲があり、狭い淺瀬が海岸に平行して帶狀に連り、十尋の等深線は餘程海岸から離れて居る。

西方篠島、野島との間の中山水道に面する海岸は西南より東北に走る直線で截斷せられ、沿岸は一帶の砂丘である、十一尋の等深線が海岸に接近して平行に走て居る。

潮流は非常なる勢を以て中山水道を三河灣内に入り東流し、立馬崎より小中山の東方に斗出せる砂洲と、宮崎より東方に斗出して田原灣口を扼せる大洲崎を形成し、灣内に入り其方向複雑に變化し、福江灣には松山洲、田原灣には大島、本島、長島、平島、佛島等の數多の形狀複雑なる洲島を形成して居る、是等は灣内に入る潮流よりも灣外に出る潮流の力が大に參與せること明かであつて、其形狀を見ても潮流の方向變化の如何に複雑なるかを想像する事が出来る、半島の三河灣に臨める沿岸は、田原福江兩灣以外は、著しい灣入は無いが、處々古生層の堅

岩より成れる丘陵の海に臨む處は多少凸出し、全體の海岸線は緩徐に屈曲せる波狀を畫て居る。

沿岸の海深は半島の基部は一般に非常な遠淺で中央部以西に漸次深く西端立馬崎附近では、十二尋の深溝が海岸に接近して横りて居る。(完)

日本の海岸に於ける貝類

黒田 徳米

日本の貝類——我帝國領土の位置が南は亞熱帶から北は亞寒帶に互つて居る關係上、地域が廣くない割に各帶の生物が種類多く産する譯で、

對しても同様に看過することの出来ない地位を保つて居ることを信ずるものである。

特に無數の島嶼から成つて居るため海岸線が比類稀に長く、ひいては海棲生物の生育區域が廣げられると云ふことになるが、常に海棲生物のみならず陸棲の諸生物に於ても、海によつて其交通を遮られるため特異の發達を遂げしめたと云ふ事實からは亦特殊な種類が多く存すると云ふ原因にもなつて居るやうである。

抑貝類の化石が層序學上に或る重要な役割を有つ如く現世貝類は亦海岸と其生物界の研究に

動物界で種類の數と個體の數に於て最も勝つて居るものは昆蟲類であつて、其次に來るものは取りも直さず貝類である、地球上現に知られて居る貝類は約六萬種だと云ふ事であるが、我日本の版圖内だけでも近來政治的に領土が非常に擴張せられた爲め現に四千種内外は報告せられて居る、尤も其内で陸上に棲むもの約九百種淡水に棲むもの百種内外あるから此等を差引いて殘る三千種内外は全然海棲種である、然し右の數字の内には最初報告せられた限り爾來後人